

座長のまとめ（４－６）

兵 昇（京都市）

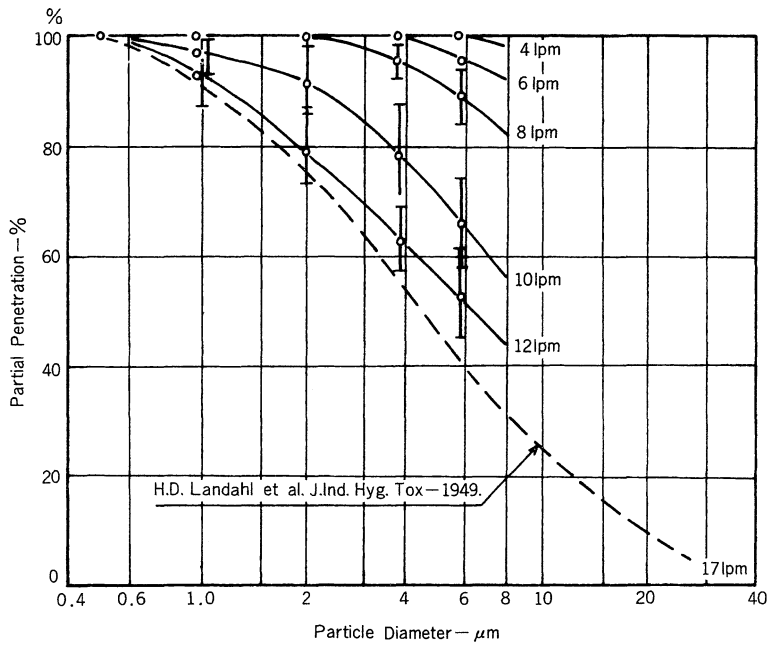
本群は３席とも鼻アレルギーに対するエアロゾル薬剤に関する報告である。４席、５席の２題は、現在脚光をあびているステロイド剤で局所吸収が殆んどないといわれている「ベクロメサゾン」の鼻内分布に関するものであり、６席は元来注射薬であるヒスタミン加人免疫グロブリンである「ヒスタグロビン」のネビュライザーによる局所応用とステロイドの併用療法との通年性鼻アレルギーに対する効果比較報告である。

佐藤等（４席）は前第４回の当研究会にての発表の定量式鼻スプレーによる粒度分布及び鼻腔捕集効果の研究を更に進めて、鼻腔模型を用いて鼻腔内エアロゾル粒子分布を高速液体クロマト法(HPLC)にて微量定量的計測を試みたものである。海野等（５席）の同形薬剤、又同じく模型による、東洋濾紙貼布法等偶然、目的、実験方法が合致したものである。計測法も共通点がみられたが、海野等の方法は感度能力が少し低く噴射３回を必要としたようであったが、鼻腔内粒子分布マップの一致は、研究成果の確実性を互いに確認し得たものと考えられる。尚噴霧時の吸気の影響は考慮に入れる必要はないと海野等は述べている。この二者の一致した実験成績は、定量式鼻スプレーの治療方式の確立に一定の示唆を与えるものである。更に種々の角度からの基礎的研究を行われることを期待する。

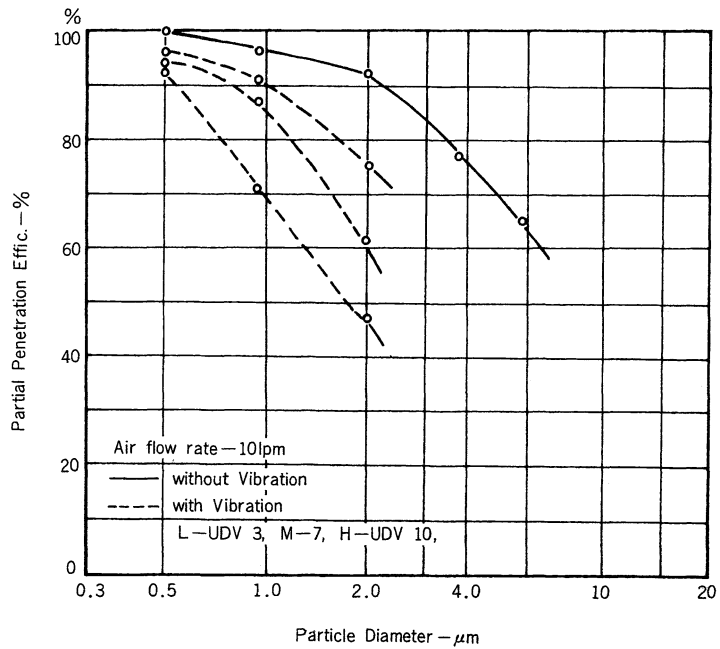
藤谷等（６席）の実験は通年性の鼻アレルギーに対するもので、単独抗元、多抗元、抗元不明例等が多いと考えられ、抗元不明例、減感作療法にも併用し得る「ヒスタグロビン」の単独エアロゾル療法と更にこれに一応他の薬剤の効果の不良時に使用されるステロイドとの併用療法の比較にて両者の併用法の方が通年性のものに比し早期に有効との報告である。ステロイドの副作用を考慮に入れながら頑固抵抗例に対する実施上の有用な情報をあたえた貴重な発表である。今後更に両者併用療法他、作用メカニズムの全く違った他剤等の組合せ治療法の検索、確立を希望する。

る必要がある。従って少なくとも発生装置の種類、出力、エアロゾル発生能力（１分間に何ml等）、及び流量（１分間に何ℓ流れる）等の諸項目を記載する必要がある。

尚本邦にては未発表であるが、「Zeitschrift für Erkrankungen der Atmungsorgane」に我々が投稿してある、流量と粒径と100Hz振動の鼻腔沈着率に関する２表を掲げる。諸彦の参考になれば幸甚である。



PARTIAL PENETRATION EFFICIENCY OF PARTICLE THROUGH THE NOSE



EFFECT OF VIBRATION ON PARTIAL PENETRATION EFFICIENCY THROUGH THE NOSE